



阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

7月例会(7月22日開催)報告

夏期修養会(7月27・28日開催)報告

「使徒言行録の学び」(第4回) 大村 栄 牧師

—新約聖書 使徒言行録 第4章—



9月に入っても夏の暑さはまだ続いている毎日です。皆様は体調など崩されてはいませんか？こうした暑さ対策では、休養と睡眠を取り、しっかり水分補給をすることが大切です。誰もが知っている当たり前の事ですが、こうした当たり前の事をするのが大切なのでしょう。

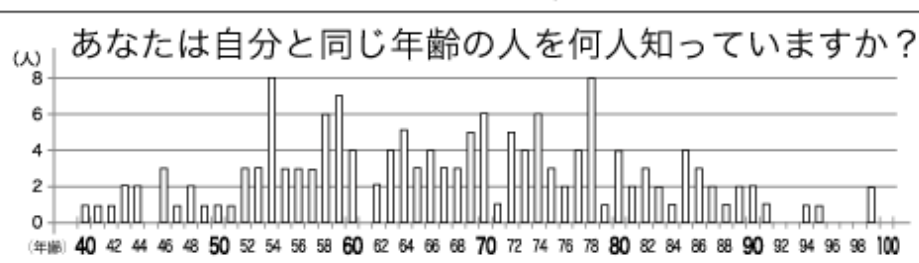
さて今号は7月22日に行われた7月例会と、その週末に開催された本年後の修養会の報告をまとめました。また、修養会が行われた事により8月の例会は無しとなっておりますので、今号は8月と9月の合併号となります。

「聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—第4章」 大村 栄 牧師

6月24日開催の信友会例会では、棚村恵子先生から、「私が持っているもの、それをあなたに」と題して使徒言行録第3章を学んでおります。良い講解であったと聞いています。神殿の美しい門の傍らに置かれた足の不自由な男に、そこを通りかかったペトロとヨハネが、「私には金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がって歩きなさい」と言われました。復活のイエスの「名」の力、イエスの名による信仰が強調されます。3章16節のペトロの説教の中でも、「あなたがたが見て知っているこの人をイエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです」と言います。私たちが主の祈りで、「御名を崇めさせ給え」と祈っています。

(次ページへ)

◎ 2011年度データから見る信友会(その4)



信友会会員は156人で、年齢は40歳～99歳です(2011年)



(前ページより)

本日の第4章に入りますが、ペトロとヨハネが民衆に話しているところに、祭司たち、神殿の祭司長やサドカイ派の人たちが近づき、話を聞いて反感を持ちます。それは、男に対する「癒しそのもの」ではなく、イエスに起こった十字架の死と、死者からの復活について話したことに對してであり、復活された主の方がその男を立ち上がらせたと言ったことに不快感を持ったためです。特にサドカイ派は、ユダヤ教会の擁護について最も熱心であり、保守的な立場にありました。イエスの復活には根拠が無いとして信じませんでした。その日二人は一旦投獄されました。ユダヤ教の最高法院では、夕方には審議を行わないしきりになっていたのでした。

4節には、美しい門の男の癒しとペトロの説教を聞いて信じた人々は多数となり、男だけで5千人になったといわれています。女性を加えると1万人位でしょうか。使徒言行録では、1章15節のイエスの昇天後に、120人に、2章41節のペトロの説教のときには、3千人ほどが洗礼を受けて仲間に加わったと書かれています。初代教会における福音伝道は、復活のイエスの名を信じる信仰が急速に広まって行くことになりました。イエスの復活のメッセージは力強く、神による新しい未来の創造を求め、力が人々を奮い立たせて力強く福音を語っています。

翌朝から、2人に対する尋問が始まります。宗教者を中心とした10人の議員による最高法院では、半円形にならんだ議員の中央に被告が立って尋問を受けます。尋問の中心は、美しい門の傍らの男の癒しは、何の権威、誰の名によるものかです。権威のギリシャ語は「ダイナミス」ダイナミックの原語になる言葉です。8節以下の聖霊に満たされたペトロの説教は、聖霊降臨の時の説教に匹敵すると言われていています。10節以下で、「この人が癒されたのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。人によって殺されたキリストを、神は救い出して復活させたことは新しい可能性を拓きました。そして詩編118編22節の、「家を建てる者の退けた石が、隅の親石となった」を引用します。ここで隅の親石とは、建物の土台の中心の石、また、アーチ状の橋などの石積の中心のクサビになる三角形の石のことです。詩編の表現では、隅の親石は政治的、社会的な指導者に使われます。詩編が読まれた当時の古代、中近東の状況は各地で大国が台頭してせめぎ合い、世界征服の野望に満ちた指導者が割拠していました。弱小国のイスラエルには目もくれない時代に、このような捨てられた国から新しい希望であるメシアの到来を希求する歌を歌っていたのです。人々が捨て去った者を神が死人の中から復活させたイエス・キリストしか私たちに癒し救ってくれないとペトロは言ったのです。無価値な者を神が用い、そこに希望と救いをもたらして下さるので





昨年の7月最初の週の説教において、「敗者復活の望み」の説教題で語りました。6月の第4週の日曜日は日本キリスト教団の創立記念日です。教団の創立は、第2次世界大戦中の1941年に軍部の圧力によってプロテスタント教会全体が統合させられて出来たのです。大政翼賛の名のもとでの無理やりの統合でした。このため戦後には、この統合を嫌った日本キリスト教会、ホーリネスやルター派など多くの教団が離脱して行きました。我々のメソジスト派はこの教団に残りました。戦時下の不条理な統合でありましたが、敗れてこれを神の摂理として捉えて、この組織に新しい可能性を目指してたのです。不幸な形で出来た組織が神の導きで新しく歩み出すという「敗者復活の望み」を持った歩みになりました。

ペトロとヨハネの毅然とした主張に議員達は驚きます。無学なナザレ人で、イエスと行動を共にしていたこともわかっており、また、美しい門の傍らの男を歩かせた事実を前に何も言い返せませんでした。そこで、この事実がこれ以上広まらないように、二人にイエスの名によって話したり教えないように命令します。しかしペトロは、「神に従わないであなた方に従うことが、神の前に正しいことか。私たちは見たことや聞いたことを話さずにはいられない。」ときっぱり拒絶します。「人に従うのではなく神に」は、使徒言行録に通奏低音のように流れており、現代の私たちにおいても継承すべきモチベーションでなければなりません。議員達は再度脅かして釈放しました。

23節以下には、釈放後の仲間との再会が書かれます。そして、最高法院での尋問の内容を報告します。使徒たちは、一つになって祈りを捧げます。天と地と海を創られ、そこにある全てを創った神であることを告白し、そして、有名な詩編第2編1～2節を引用します。詩編は、「なにゆえ、国々は騒ぎたち、ひとびとは空しく声を上げるのか。なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して主に逆らい、主の油注がれた方に逆らうのか」。この時代には、ヘロデ、ポンテオ・ピラトは異邦人やイスラエルの民と一緒に主の油注がれた聖なる僕イエスに逆らい、あらかじめ定められたように十字架に架けたのです。神が復活させたイエスの力を一同が思い切って、大胆に御言葉を語る事が出来るように祈り、そして、イエスの名によって病気が癒され、しるしと不思議な業が行われるようと祈っています。聖霊に満たされ大胆に神の言葉を語りだしています。

初代教会における、主の復活のエネルギーと聖霊を受けた使徒たちが、大胆に語りだす様子が生きいきと表現されています。次に「持ち物の共有」については5章につながる話題なので次の機会にします。

(文責：玉澤武之 写真：小笠原教久)



2012年度信友会修養会

時：2012年7月27日(金)～28日(土)
於：ナザレ修女会エピファニー館

主題：教会標語「絶えず目を覚まして根気よく祈りなさい」(エフェソ6：18)
修養会テーマ：「祈りある生活」

信友会修養会は「祈りある生活」をテーマに7月27日～28日まで三鷹のナザレ修女会・エピファニー館で行われた。オリエンテーション後、加藤真衣子副牧師による開会礼拝「主の御前に心を注ぎ出す」の説教が行われた。その後は会員の近況報告と懇談、夕食後は大村栄牧師による基調講演「祈りの心」を受けて、参加者全員で「祈りある生活」について活発な話し合いが行われた。翌日は早朝からナザレ修女会のミサと聖餐式に参加させていただき、その後「祈りある生活」をテーマとし、清永正雪兄、小野淳二兄、打方真樹兄の3人から発題があった。祈りの要素や意義、祈る事の大切さ、方法など普段余り話し合う事の出来ないことをこの二日間で語り、学ぶ事が出来た。またひとつとき男性四部合唱などの練習も行い、楽しい交わりを持つ事も出来た。参加者は20代～80代までの29名(教職2名含む)であった。



開会礼拝：「主の前に心を注ぎだす」

(聖書：サムエル記上第1章1節～20節)

加藤 真衣子 副牧師

エルカナの妻であったハンナには子が生まれなかったため、エルカナは2人目の妻ペニナを娶り、息子たち、娘たちが産まれました。古代ユダヤにおける妻の立場は後継者を生まないことは大変なことであり、妻たちの間でも子供がない方には大きな重圧を受けることになり、ハンナは思い悩み、苦しみました。

いけにえを捧げる日に家族みんなで神殿に上りましたが、ハンナは必死に祈ります。「万軍の主よ、はしための苦しみをご覧ください。はしのために御心を留め、忘れることなく男の子をお授けくださいますなら、その子の一生をおささげし、その子の頭に決してかみそりを当てません。」。旧約聖書における有名な「ハンナの祈り」ですが、心を注いだ祈りは、祭司エリには酒に酔ったように見えたようです。

8節の子がないことの悩みは、エルカナの慰めも答えにはならないし、祭司エリもハンナの苦しみは解らず不謹慎としか見えなかったのです。ハンナは、「ただ主の御前に心を注ぎ出していた」(口語訳)と言います。ここで心は、ハートではなくネフェシュ即ち息や生命で、心を注ぐということは「私の全てを注ぎ出す」という祈りでした。全て(=全人格)であって、一部ではありません。きれいな部分だけではなく隠しておきたい闇の部分も全て出し切った祈りです。闇や痛みにおいてこそ、神は寄り添ってくださいます。全人格を求め、全人格を受け止めてくださる神、それが私たちの神です。祈りは献身に通じます。私たちの献身に先立って、主イエスの献身と犠牲があります。「彼は自らを(自分のネフェシュを)なげうち、死んで、罪びとのひとりに数えられた(イザヤ53：12)」。今回の修養会で、私たちが神さまに自分のネフェシュを注ぎだし、多くを学んで行きたいと思います。



基調講演：「祈りの心」

(聖書 ルカによる福音書第 18 章 1～17 節)

大村 栄 牧師

信友会の修養会は、教会標語「絶えず目を覚まして根気欲祈りつづけなさい(エフェソ 6:10)」を主題に、「祈りある生活」を副題にして行われます。今回、5編の有名な祈りを持ってきました。

- (1) アシジのフランシスコの平和の祈り、
- (2) ラインホルト・ニーバーのセレニティーの祈り、

(3) 人生の祝福(ニューヨーク大学リハビリセンター、作者不明)、

(4) 継続する祈りの奨励(作者不詳:英国)、

(5) 最上のわざ(ヘルマン・ホイヴェルス神父)

これらは、私たちが做すべき代表的な祈りです。

(4)の英国の作者不詳の祈りはあまり知られていないが、この祈りを要約すると次の通りです。「日常の多忙の中で祈りを忘れ、問題が起こり神が助けてくれないと不平を言うとき、神は、「あなたは頼まなかったよ」と。なぜ望む幸せを与えてくれないと嘆いたとき、「あなたは求めなかったよ」と。神の扉を開けようとしたとき、「子よ、あなたはノックしなかったよ」と言われる。私は早朝目を覚まし、やるべきことが沢山あるが仕事を始める前に、まず祈りの時を持った。」根気よく、絶えず祈ることを薦めた祈りであり、祈りの継続性の大切さを示唆しています。今回の主題に相応しい祈りと言えます。

「やもめと裁判官のたとえ」

今回の主題を学ぶに当たって、ルカによる福音書第 18 章 1 節から 17 節を取り上げます。2 節からは傲慢な裁判官とやもめの女のたとえから神の救いが語られます。やもめの女は、最も弱い存在であり、身の上にもふりかかった問題もその弱さのゆえに解決不能であったので裁判による保護を求めます。ここでの裁判官は、神をも恐れず人を人とも思わない人物で、やもめの訴えはほうっておかれました。

しかし、やもめの執拗な訴えに、裁判官は身の危険すら感じたので裁判を行うことにします。ここでは、やもめの必死な願いの力が裁判官を動かしたのです。このたとえから、イエスは「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。言うておくと、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか」と言われます。

新約聖書が書かれた紀元 80 年代は、エルサレム神殿が崩壊し、ローマの一層の圧制のなかで人々が呻吟していた時です。そんな中で、信仰の故に迫害を受けている人たちの昼夜にわたる祈りを、神さまは聞いて下さらないわけがないと言っているのです。

ここで言う「選ばれた人」とはどのような人でしょうか。ルカ福音書では、「群衆」と「民衆」が分けて表現されます。バプテスマのヨハネからの洗礼に集まった人たちはご利益を求める人たちで、「群衆」(オク로스)と呼ばれます(3 章 7 節)。9 章では、イエスのもとに集まった 5 千人の人々に食べ物を与えようとする事が書かれていますが、それらの人たちはイエスの奇跡に興味を持っ

(次ページへ)



(前ページより)

ただけの烏合の衆です。イエスはこれらの人たちを 50 人単位のグループに分けて座らせます。興味本位で集まった人々は、「群衆」でしたが、イエスによって秩序を持って集められた集団は「民衆」(ラオス)と呼ばれます。選ばれた人は、メシアの到来を待ち望み、神さまを求め続ける本当の礼拝者として整えられた人たちのことなのです。



第 18 章に戻り、礼拝者として整えられた人、選ばれた人ですが、この人たちに対して神は応えてくださらないはずはないと言っています。この時代の殉教の危機にあるキリスト者の切なる祈りをいつまでもほうっておくわけがないと言うのです。一方、人の子が再び来る時、即ち最後の審判の時まで信仰を持ち続けている人々はどれくらいいるかを憂います。「人の子が来る時、地上に信仰が見られるであろうか」(8 節)。これは神を求め続け祈り続けることの困難さを言っており、これは質問ではなく警告です。気を落とさずに絶えず祈り続ける人には、必ず応えてくださると信じる姿勢を学ぶべきです。



「フリサイ派の人と徴税人のたとえ」

18 節からは、自分は正しい人間であるとうぬぼれて、他人を見下している人に対するたとえです。



祈るために神殿に上った二人の人がおりました。その一人はファリサイ派の人で、自分は他の人たちのように奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者ではない。週に 2 度断食をし、全収入の十分の 1 を捧げていることを祈っています。律法的には欠けるところがない人間であると言っています。一方、徴税人は、遠くに立って目を天に上げることせず、胸を打ちながら、「神さま、罪人のわたしを哀れんで下さい」と祈っています。イエスはこの二人のうち義とされて帰ったのは徴税人であると言います。そして、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と言っています。



ファリサイ派の人は正しい生活を旨として律法を守り宗教的に純粋な人でした。このような人が「選ばれた人」であるともいえるかも知れません。一方、徴税人は、ローマ帝国のための税金を徴収するという悪しき政治に加担する立場にあり、ユダヤ人の反感を常に受ける立場の人でした。イエスが祈りの姿勢として義としたのは、徹底的に自分を罪人と認めてへりくだって祈る徴税人のほうであると言うのです。ここでは、自分の正しさを誇り、他人を見下す姿勢ではいくら崇高な祈りを行っても受け入れられません。



それでは、生活を肯定する祈りを止めて、いつもへりくだって祈っていれば良いのでしょうか。このような、安易にへりくだるという逆説的な生き方は、受け入れられるのでしょうか。これに対する答えは、次の幼子のたとえにつながります。



子供を祝福する

人々がイエスに触れてもらうために、乳飲み子を連れてきたのを弟子たちが叱って留めました。しかしイエスは、「子供たちをわたしのところに來させ

なさい。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく、子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」と言います。乳飲み子は自分の弱さを認識し、親に依存しなければ生きられないことを本能的に知っています。乳飲み子は母親の乳を素直に飲み、中身を疑いません。私たちも乳飲み子のように神さまを信じ依存する姿勢を持たなければなりません。

近代は啓蒙主義の時代から、物事を先ず疑うことが「知性」であり、この姿勢が科学技術を進歩させたと言われます。しかし信仰者にとっては、神への信頼が最も大切です。信仰が教えるのは、神に信頼し、その御業を受け入れると言う受動的な姿勢です。自分の正当性を誇るのではなく、へりくだって祈る謙遜を身につけなければなりません。

今年度の教会標語にあるように、根気よく絶えず祈ることです。幼子のように神への信頼を持って根気よく祈りつつ、神を待ちつつ生きる姿勢を学んで日頃の生活の中に生かしていただきたいと思います。

(文責：玉澤武之 写真：松田俊彦)



二日昼食後エピファニー館中庭にて (撮影者：松田俊彦)